

氏 名	末森 薫			
学 位 の 種 類	博士（学術）			
学 位 記 番 号	博乙第	2 8 8 9	号	
学位授与年月	平成	3 0 年	7 月	3 1 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当			
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	敦煌莫高窟に描かれた規則性を備える千仏図の研究 Study of Patterned Thousand Buddha Image depicted in Mogao Grottoes, Dunhuang, China			
主 査	筑波大学教授	博士（文学）	八木	春生
副 査	筑波大学教授	博士（農学）	黒田	乃生
副 査	筑波大学教授	博士（学術）	松井	敏也
副 査	横浜美術大学准教授	博士（文学）	濱田	瑞美

論文の内容の要旨

末森薫氏の博士学位論文は、これまであまり重要視されてこなかった敦煌莫高窟の千仏図に着目し、規則性を備える千仏図が示す視覚的特徴が、石窟の空間において重要な役割を担うという仮説のもと、千仏図の描写方法の解明、千仏図の役割の検証、千仏図を通した莫高窟の解釈の三点について考察を行ったものである。序章および終章を含め、全八章から構成される。要旨は以下のとおりである。

末森氏は序章において、莫高窟の概要を記した上で千仏の思想的背景について述べた。また中国の他地域に確認される千仏図の特徴や、先行研究において指摘される規則性を備える千仏図の特徴をまとめ、本研究で扱う各論点の問題意識および方法を説明している。

第一章では、千仏の袈裟の着衣形式やその袈裟や天蓋、台座に使用された彩色の系統を検討することで、千仏図がどのような規則をもって配置されているかを論じている。その結果、千仏が基本的に八体一組として描かれ、八体目に同じ着衣形式と配色を持つ図像が表れるように配置されること、それが縦に各列一つずつずらして並べられることで、同じ配色を持つ坐仏を斜めに連続させる視覚的特徴（斜行方向）があること、また隣り合う図像同士の配色に着目した場合、視覚頭光・身光の配色の組み合わせから、「一方向型」と「交差型」のあることを末森氏は明らかにした。

第二章で末森氏は、坐仏の一体一体に過去仏あるいは未来仏の名が記された第 254 窟を

取り上げ、窟内において千仏図の視覚的特徴の用いられ方を検証した。第 254 窟では、切妻天井下部の前部空間と、柱の周囲の後部空間で千仏図は斜行方向の設計が異なり、前部空間では南北対称の構図、窟後部では一方向の構図で描かれていることが確かめられ、前部と後部とでは、空間の役割が異なることを論証している。また末森氏は千仏図の頭光・身光の配色と、傍題に記された過去仏・未来仏の名の関係性より、頭光・身光の配色によって過去仏および未来仏の区別をおこなったことを明らかにした。

第三章では、北涼から北魏の造営に位置づけられる窟を北朝前期に位置づけ、造営年代の違いより第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期に分期した。そして、造営時期ごとに、規則性を備える千仏図の設計を中心に、窟形や造像、その他の図案の配置など、各窟の空間がどのように構成されているかを確認した。そして末森氏は北朝前期初期より、規則性を備える千仏図の二つの視覚表現が使い分けられ、北朝前期第Ⅱ期と第Ⅲ期では同図案の設計が大きく異なり、空間の捉え方に変化が生じたことを明らかにした。

第四章で末森氏は、西魏の造営に位置付けられる窟を対象として、規則性を備える千仏図の描写設計や、同図案とその他の図案との関係性を通して、各窟の空間が備える特徴および規則性を備える千仏図の役割を考察した。その結果、方形窟の第 249 窟の規則性を備える千仏図には、天井に描かれた図案との関係性が認められ、斜行方向によって上昇性を示していることを指摘した。また、中心柱窟の第 248 窟は、同図の斜行方向によって下降性を示していると捉えられ、西魏窟の規則性を備える千仏図には、地上界と天上界を繋ぐ役割が付与されているとした。

第五章では、北周の造営に位置づけられる窟を対象に、規則性を備える千仏図に加え、場面展開のある説話図（画卷式説話図）、飛翔する伎楽天図（伎楽飛天図）、進行する供養者図（供養者列図）の各図案が示す方向性に着目し、石窟空間の特徴を考察した。末森氏は中心柱窟の第 290 窟では方向性を示す図案によって、窟全体を集合的に捉えた空間が創出されているに対し、大型中心柱窟の第 428 窟では図案の示す方向性に壁面を跨がせる意図は希薄であり、大人数が同時に礼拝をおこなうことのできる空間が構成されていることを明らかにした。また規則性を備える千仏図が天井面にも配置されるようになり、同図案が天上界にも存在する図案として捉えられはじめたことを指摘した。

第六章で末森氏は、隋の造営に位置付けられる窟を三期に分期し、方向性を示す図案を中心に空間の特徴を考察した。隋第Ⅰ期、第Ⅱ期では、北周窟と同様に方向性を示す図案が多用されており、動的な空間が創出されていることを指摘した。隋第Ⅱ期の中心柱窟の第 292、427 窟では、天井や中心柱の広い面積に規則性を備える千仏図が描かれており、窟全体を千仏が充満するような空間が創出され、方形窟においても伏斗形天井四披全面に同図を配置する窟が登場し、窟空間における千仏図の役割が最盛期を迎えたとする。また末森氏は、方形窟の第 420 窟では規則性を備える千仏図の視覚的な特徴を応用して、精緻な対称性を示す新たな描写が採り入れられ、描写方法においても新たな展開が見られたこと、その一方隋第Ⅲ期では、規則性を備える千仏図を天井部にのみ配置する窟が登場する他、設計に一貫性や整合性に欠く同図案が描かれるようになり、石窟空間において同図案が示す視覚表現の重要性が失われていく傾向を明らかにした。隋第Ⅲ期では、図案による方向性を示す意図が失われはじめており、動きのある動的な空間よりも、礼拝の対象と対

する静的な空間が求められるようになったことを指摘している。

終章で末森氏は、本研究で提示した三つの論点について、各章で得られた成果をまとめる形で整理し、各論点の結論を示した。そして、規則性を備える千仏図の変遷の大きな流れを、受容期、発展期、変容期、停滞期、再興期、衰退期の六期に分期し、莫高窟の石窟造営の展開について解釈を示し、さらにこれからの研究の展望について述べ本論を結んでいる。

審査の結果の要旨

(批評)

末森薫氏の敦煌莫高窟北朝期における千仏図の研究は、これまでほとんど注目されなかった千仏図を取り上げ、その描写における規則を明らかにしただけでなく、そこから修行者の動きや造窟の意図までを明らかにした点で高く評価できる。これまでただ壁面を充填するだけのものと考えられていた千仏が、複雑な規則性を持って描かれていたものであることを論証したことは非常に重要であった。またそこに過去仏、未来仏を表す意味だけでなく、修行者の動きを示していたことを明らかにしたことは、石窟の造営思想の解明の上でも敦煌莫高窟研究を大きく発展させると考えられる。中国でも行きにくく、一回の調査窟の数が制限され、調査のしにくい敦煌莫高窟に何度も足を運び地道な研究を行ったことも高く評価され、この研究が日本のみならず中国においても大きな影響を与えるであろうことが確信される。

平成 30 年 6 月 20 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、学力の確認を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。